

甚大な災害時に情報が無いことから得られる情報

大阪産業大学 正会員 ○藤長 愛一郎
大林組 正会員 佐々木 哲男

1. はじめに

2011年3月11日に起こった東日本大震災と福島第一原発事故では、初期の時点で正確な情報が報道されなかった。一方で、この地震で直接的な被害が少なかった東京都内では、スロープや看板が落ちたことなどが正確に報道された。この様に地震・津波や事故が起こった後、その正確な情報が入ってこない時間（情報空白時間）が長ければ、甚大な被害が起こっている可能性が高いといえる（図1参照）。そこで、本研究では、東日本大震災を始めとする大災害と情報空白時間の関連性を調べ、災害を察知した際の個人の対応策を全国各地の災害に関する伝承など役立ちそうな情報を検討する。

2. 調査方法

(1) 情報空白時間

東日本大震災を始め、今までに起こった災害事例から、情報空白がどの位続いたのかを調べる。そして、情報空白時間の原因について調べ、分類する。

(2) 災害についての伝承

「情報空白時間」で甚大災害と分かった場合、どう行動するかの判断の支援とするために、昔からの言い伝えを調べて検討する。

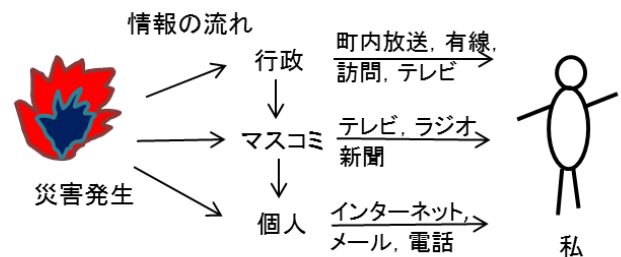


図1 情報がある場合のイメージ（経路が一つでも断たれれば、情報が私まで届かない）

3. 結果

3.1 情報空白

(1) 情報空白時間(東日本大震災の場合)

- ① 停電は数日で回復した家庭が多かった（1週間で大部分復旧¹⁾。
- ② 津波の警報は3分：地震後、約20分後に大津波が来た。しかし、地震発生後の3分後には岩手、宮城、福島で大津波警報が発令されており、この情報を得ることができた住民は避難することが可能であった。
- ③ 津波の被害は2,3日：津波の行方不明者（死者含む）については、4日目まで、かなり限定的な人数しか分からなかった（図2参照）。
- ④ 原発についても、津波を受けて「全交流電源喪失」を東電が認知した後、約1時間経ってNHKが放送した。民放Nテレビはさらにその1時間後であった。同様に、「炉心冷却装置注水不能」についても、NHKが放送したのは、東電の認知から約1時間後であった。

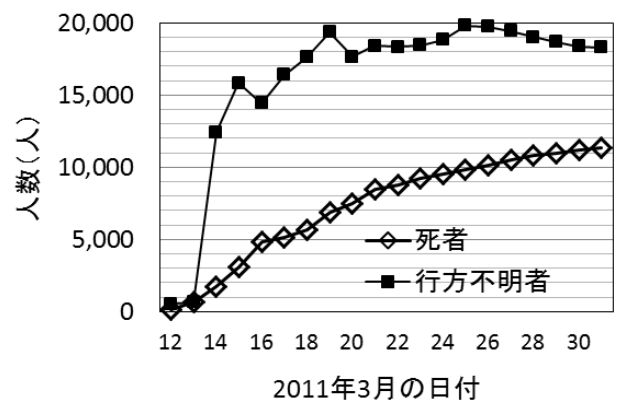


図2 東日本大震災による死者・行方不明者の推移（朝日新聞に発表された人数に基づき作成）

(2) 情報空白が生じた原因

- ① 国に情報が無い：東日本大震災では、本来情報を把握しておくべき国にも情報がなかった。
- ② マスコミに情報が無い：全国ネットのテレビでは事故の内容が分からないまま、福島中央テレビの福島第一原発の爆発の映像を放送した。それで、専門家や解説委員は想像でしか話せなかった。その際には視聴者を不安にさせないように気を使って話している一方で、最悪のことを想定した危険性についても話していた。

キーワード 甚大な災害、情報空白時間、伝承

連絡先 〒574-8530 大阪府大東市中垣内 3-1-1 大阪産業大学工学部都市創造工学科 TEL 06-875-3001

③ **マスコミの問題**：甚大な災害の場合、マスコミ自体も被災しており、取材が困難となる。また、取材を行った後の伝達手段がない場合も考えられる。また、マスコミは報道することを優先させるため、取材や放送に都合がよい場所や地域を選んでしまうことも考えられる。さらに、視聴率を気にした報道内容になると、公平に伝えることはできないなどの問題も生じる可能性がある。

④ **受信側の問題**：停電や携帯電話の中継基地の被害などで、受信できない場合も考えられる。

3.2 災害についての伝承

① **教訓**：災害に対する昔からの教訓として、「津波てんでんこ」は三陸地方で昔からあった教えであるが、東日本大震災後に、度々取り上げられ、全国的に広まった。元々は家族や地域の全滅を防ぐために、てんでばらばらに逃げて生存率を高めるという意味であるが、避難している人を見て、周囲の人も避難するというのが極意という捉え方もある²⁾。

② **動物の動き**：動物にはわずかな環境の変化を察知し、災害を事前に予知能力が人よりも備わっている。よって、動物を観察することで、災害を察知することができるというもの。例えば、「ナマズが動くと地震が起こる」や「キジが鳴くと地震が来る」などである。また、植物や天候などに関係する話も多い。

③ **迷信**：しかし、その土地に経験のないことは間違った伝承となる可能性がある。例えば、秋田県の男鹿半島では、1939年の男鹿地震で津波が来なかったことから、「地震時には浜に逃げた方が安全だ」との伝承があったが、1993年の日本海中部地震では津波が来た。また、呪文をとねえと、地震など災害がこないといった例は多数ある。

4. 考察

図3に情報空白時間に基づく判断のフロー図を示す。災害発生後、情報空白ができた場合、その時間から、この災害は異常(想定外)か想定内かを判断する。想定内の場合、各自治体の連絡を受けて、必要な場合には指定避難場所へ移動するなどの行動をすることになる。一方、異常と判断された場合、どのような行動をするか。例えば、[A]避難すればよいのか、[B]今いる場所(家など)に留まるべきなのかを判断する必要がある。その際の情報として、伝承に有用なものがあり、動物の動きは災害の前兆として利用できそうである。しかし、その地域にしかあてはまらない話も多い。よって、まず各地域の特徴や防災を事前に知っておくことが重要であるといえる。そうでないと、間違った教訓“迷信”になってしまう。

以上のことより、甚大な災害時には情報空白時間といえども、近隣住民からの情報やラジオ、テレビなどからわずかでも情報を収集し、最終的な避難判断については、全ての情報を個人が総合的に判断して、行動することが、「津波てんでんこ」の精神であると思われる。

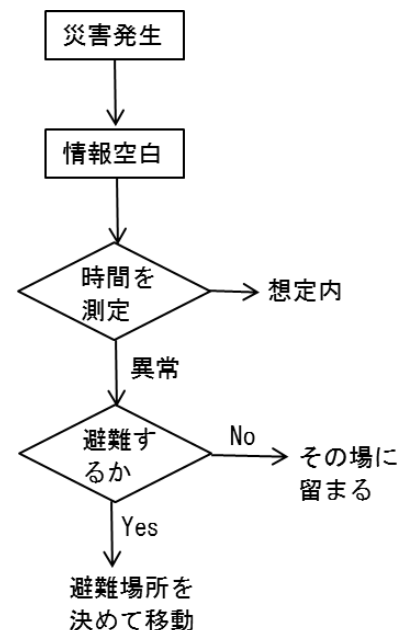


図3 情報空白時間に基づく避難の判断

5. 結論

災害が起こって、一定時間、正確な情報が入って来なければ、甚大な被害が起こっていると考えられる。その様な状態になった場合、避難するのか、その場に留まるのかなど、どの様に対応するのかの判断が必要となる。そのため、昔からの伝承である天候や小動物の動きを見るなど、周辺の環境を良く観察し、様々な情報を取り入れ、総合的に判断することが防災に求められるといえる。

今後の課題として、今回示した「情報空白時間に基づく避難の判断」のフローチャートを吟味するために、地域や災害を設定したケーススタディを行い、具体的な事例を示していきたい。

参考文献 1) 東北電力: 地震発生による停電等の影響について、緊急情報 <http://www.tohoku-epco.co.jp/emergency/9/index.html>. 2) 田中伯知: 災害と社会構造, 芦書房, p.52, 1998.